

## 私の研究履歴書と研究論

梅垣先生、ご紹介をいただき、ありがとうございました。本日は、この授業の特別講義の講師としてお招きをいただき、光栄に思います。

大学院生を対象としたこの授業科目「概念構築」は、大学院生が今後研究活動を進めていくうえで基礎となる幾つかの知的スキル、ことに研究視点の設定方法、諸概念の整理統合の手法、文献データベースの構築方法、などを講義と実践によって学習することを目的としたものである、と私は理解しています。そのために有効な一つの方法は、梅垣先生の先ほどのご説明によれば、多彩な背景と研究履歴をもつ何人かのSFC教員に研究歴や研究手法を披露してもらい、その話をもとに議論を行うことである、ということでした。従って、本日の特別講義は、その一環というわけです。

ただ、私は、自分の過去を人前で語ることを趣味とするものではありません。また、そうするほどの年齢に達しているわけではなく、ある分野のオーソリティ（大家）というわけでもありません。さらに、これからお話する私の研究経験が、果たしてこの授業の狙いに合致したものなるかに、自信はありません。もし、授業の一コマが無駄になったというご感想で終わるようならば、その責任は私にあるというよりも、私を指名された梅垣先生にある、とお考えくださるのがフェアであると思います。

以下では、まず私の研究領域（テーマ）を述べたあと、研究テーマの変遷のカギとなった研究書や指導者との出会いを振り返ることにします。次いで、私の研究テーマが持つ意義をどう認識しているか、研究とは何か、どのような方法によるべきかについての私見を述べます。そして最後に、研究活動に関する大学院生諸君へのアドバイスを総括したい。

### 私の研究テーマ

私の研究領域は、金融論、日本経済論、この二つです。どちらも極めて広範なテーマを含んでいます。ことに後者は、すべての経済問題を含むともいえますが、その中でも特に景気変動論、企業投資論、日本企業論（コーポレート・ガバナンス論）などに興味があります。

日本経済を扱う場合、体系的な理解をするには、単に国内面だけではなく、対外的側面も視野にいれる必要があるため、必然的に国際貿易論、国際金融論なども一体化させることになり、このためこれらの分野の研究もしています。また、そうした視点に立った経済理論（オープン経済のマクロ経済学）や、国際経済ないし国際金融それ自体にも興味を持っているので、これらも種々勉強してきました。その場合、地域としては、特に環太平洋諸国（日本、米国、東アジア、大洋州）に焦点をあて、これら諸国の社会経済論というかたちの研究をしています。

研究領域は、以上のようにたいへん広範に亘っています。その理由は、私のこれまでの職業生活において、日本の金融政策を預かる日本銀行で日本経済全般に関する調査・研究に二〇年以も関わっていたためです。日本経済の動向に大きな影響を与える金融政策を運営するには、日本経済の現状判断および将来に関する予測が的確にできていることが大前提になります。このため、結局、経済の一側面だけではなく、金融と実体経済、国内経済と国際経済、といった総合的の視点からの深い理解が欠かせま

せん。こうした職業上の要請は、視野を広げてくれたので、とても幸いなことでした。ただ、現状は研究範囲があまりに広範にわたりすぎている（従ってエネルギーを分散させすぎている嫌いがある）ので、今後はもう少し絞り込みたいと考えています。

### 研究テーマ変遷のカギとなった研究書

研究テーマとして金融の領域に興味を持ったのは、それが複合的理解を求める分野であり、その分奥行きが深いと思ったことが大きな理由です。つまり、金融現象を的確に理解するうえでは、単に金融理論を知っているだけでは不十分であり、関連する制度や慣行についても多くの専門的な知識や深い理解が不可欠になります。経済の分野でこの両者を要求するのは金融が随一であり、そこに魅力があったわけです。また、人一倍努力すれば、他の分野よりもプロの研究者になれる可能性が大きいという戦略的予想を持っていたことも、また事実です。

金融に関してそうした認識を持っていた学部上級生の時代に、特に感銘を受けた研究書を二つ挙げるとすれば、一つは、鈴木淑夫『金融政策の効果：銀行行動の理論と計測』（一九六六年）です。著者の鈴木氏は、私が後日、日銀に入行してから配属された種々の部局において二〇年内外も直属の上司となった方です（日銀では金融研究所長、理事などを歴任、そのあと野村総合研究所理事長に就任、現在は衆議院議員）。

私にとって本書が驚異であったのは、第一に、米国における最先端の金融理論を日本の銀行行動に適用するとともに、それを周到な定量分析で実証していたことです。第二に、日本の金融に関する慣行や制度に対する深い理解と該博な知識がその分析に見事に折り込まれており、鋭い現実感覚にあふれる書物だったことです。そして第三に、何よりも、そうした書物が、日銀入行後わずか一〇年内外の若手（まだ肩書きが付かないヒラ職員）によって書かれたものであったことです。この書物は、日本の金融分析において金字塔を打ち立てた研究という評価が当時からなされたものでした（日経経済図書文化賞を受賞した）が、私個人にとっては、金融分析への興味と日銀における仕事への関心をさらに掻き立てるものとなりました。

今ひとつの書物は、Don Patinkin, *Money, Interest and Prices*（一九六五年）です（著者はイスラエルのヘブライ大学教授）。これは、書名（通貨、金利、および物価）が示唆するように、種々の制約や摩擦がない場合のマクロ経済の運行を、一つの大きな壁画のように見事に描いてみせた書物です。

私にとっての本書の魅力は、第一に、マクロ経済の一般均衡達成のメカニズムが、価格による調整（新古典派的視点ないし米国シカゴ学派の伝統）を柱とした美しい理論として提示されていることでした。そして第二に、その記述のスタイルが、本文では言葉と幾つかのグラフを用いて明快な説明がなされる一方、付録ではより厳密かつ分析的な数学的な展開がされていることでした。この書物は約七〇〇ページの大冊ですが、そのうち数学付録が何と三二ページにも及ぶ（本文と付録が長さの上で半々である）という異例の構成をとっています。

経済学があくまで一つの社会科学である以上、それがいかに難解な装いをしてものとなろうとも、経済理論のエッセンスは平易な言葉で説明され、最終的には政策の思考に資するものである必要がある（さもなくばそれは知的遊戯に過ぎない）、と私は

常々考えています。そうした点からみると、この書物は、厳密さ（数理的展開）と平易な説明の二つを組み合わせた見本として、感銘深いものでした。この本のスタイルに魅せられたため、あとになって私は、比較的長い数学的付録を付けたかたちの論文を五、六編書きました。

### 指導者との出会い

大学四年の時、よくあるケースですが、大学院へ進学すべきか、それとも就職すべきか、迷いました。私が就職活動をしている時、日銀人事部は、前述した書物の著者である鈴木氏と面会する機会を与えてくれ、その面談において色々事情を聞いた結果、日銀に入行することを決めました。それから二〇年以上、日本銀行で様々な仕事（とりわけ経済の調査や研究）をする機会を得ました。この間、日銀では先輩、同僚、そして後輩の諸氏から実に多くのことを学びましたが、とりわけ鈴木氏からは、金融経済の見方や実証の仕方などのほか、政策的な発想、一步先んじた認識の必要性、分かり易い説明の仕方など、様々なことを教わりました。

その後、一九九一年以降は、米国および豪州の大学に派遣されて教壇に立っていましたが、そのうちにSFCに招聘されました。初志を実現する上では、結局たいへん長期間（二〇年以上）を要しましたが、しかし幸いにも円滑にその道へとシフトすることができ、今日に至っているというわけです。

### 研究テーマの意義

金融論の特徴とその魅力。それは、単に理論的な理解によってだけでなく、制度的な知識も一体となって初めて意味のある金融論が成立するという点、すなわち金融論は奥行きが深いことにある、と述べました。

また、別の見方をすることもできます。つまり、お金は全ての経済取引において逆方向に流れる「もの」と考えることもできます。従って、お金の流れをみることは、経済の動きそれ自体をみることとなります。あるいは、お金のやり取りである金融というプリズムを通して経済全体をみる、という切り口から経済を理解することも可能です（私の日本経済論はこうした視点に立脚しています）。

このような視点を与える金融論の具体的テーマは、実に多様です。金利、為替レート、銀行行動、不良債権など金融論の本来的テーマ自体、まず極めて多い。また最近では、例えば「電子マネー」を的確に理解するには、その安全性確保のための暗号技術の知識も必要になっており、またデリバティブ（金融派生商品）の意義や政策課題を考えるうえでは、会計学の知識が不可欠になっています。このように、新しい現実に対応した金融の研究をするには、領域融合的な知識と視点の必要性が一層高まっています（それらの例は『環境変化と日本の金融：バブル崩壊・情報技術革新・公共政策』を参照）。学問としてのこうした拡張性が高いことも、広い意味での金融論の特徴であり、また魅力ともいえましょう。

### 研究の三つのタイプと研究方法私論

まず研究という場合、三つのタイプ分けが可能であると思う。一つ目は、理論モデルの構築とその操作、すなわち理論的研究である。二つ目は、データや実例を用いた実証研究、すなわち事実発見型研究である。三つ目は、既存の事実ないし理論の間の

脈絡付けや、新しい解釈を付加する研究である。私は、これを「透視型研究」とよんでいる。

研究といえば、通常、第一や第二のタイプがすぐに念頭に浮かぶが、第三のタイプは、第一や第二のタイプを補完するとともに、われわれの認識の仕方を拡張するので、一つの研究の行き方であることに変わりはない。この分類に従えば、私の最近の二冊の著書「現代金融の基礎理論」および「環境変化と日本の金融」は、ともに第三のタイプの研究を中心としている。その味見をされたい場合は、直接これらの書物をみていただきたい。

ここでは、この三分類にこだわらず、より一般的に「研究」をする場合のポイントを考えてみたい。

### 基本概念の明確化

まず第一に重要なことは、基本概念の明確化（用語の厳密な定義）である。修士論文の中間発表会でいつも思うことは、当該研究で中心となる概念や用語を最初に明確に定義せず、あいまいなまま使用しているケースが実に多いことだ。最近の実例をいえば、多少差し障りがあるかもしれないが、「シニア・ビジネス」「成熟期の企業」「ナレッジ・マネジメント」など、日常よく目にするこれらの言葉を論文のテーマとしたり中心概念としたりしている場合、それらの正確な意味が定義できているかどうかを質問したところ、かなりあいまいな返答しか返ってこない、という経験をしました。こうした批判的な印象は、単に私だけでなく、修論中間発表会のあとで、多くの同僚教員がいつももらしていることでもあります。研究（発表）においては、概念の明確化が、先ず不可欠です。

### 本質的要素を取り出した理論化

第二に重要なことは、色々な事実を単に集めただけでは研究にならず、それらを理解する枠組みの構築、つまりモデル化・理論化・単純化である。本質的要素を取り出してモデル化した分析、ないし理論的分析は、単なる常識によっては必ずしも明瞭でないことを明らかにする力をもっています。

例えば、国際貿易の理論において「要素価格均等化定理」という重要な命題があります。これは、二国間でモノ（財）の貿易取引が行われるならば、その結果、そのモノを生産するために投入された生産要素である労働の価格（つまり賃金）が二国間で（一定の条件の下では）均等化する、という主張である。直接取引されることのない労働について、その価格（労働の限界生産性）が各国でこのように均等化する（つまりモノの貿易取引は国際移動性のない労働についても国際移動があるのと同じ効果をもたらす）、などということは、通常の常識ではとても思いつかないことです。これは、モデルを構成した分析によってこそ、初めて明らかになること（理論分析の威力）といえるでしょう。

モデルは言葉や概念によって構築されることが少なくありませんが（特に社会科学の場合）、厳密性を追及しようとする場合には、数学を用いて構築すること（数学的モデル）が有効になります。数学は、一見とっつきにくいですが、分析対象とする各種の要素やそれらの間の関係を純度の高いかたちで抽出する手段として利用可能です。また、モデルを構築すれば、その後には演算が可能になるため、研究者自らが頭の中で

行う論理操作を大いに節約できるということも、大きな特徴です。むしろ、何でも数学的にモデル化できるわけではないが、諸君の頭脳は若く発想力に富むので、そうしたことにチャレンジしてほしい（私もかつては色々試みたことがある）。

また、モデルを構築した後は、そのモデルが数学モデルであれ概念モデルであれ、それを操作し条件変化の下での帰結を予想すること（theoretical conjecture）、あるいはシミュレーションを試みるがことが必要である。これは、そうしたモデル化の妥当性を確認するうえで欠かせない手続きであり、またそのモデルの有効性の高さを評価する一つの方法にもなります。

### 利用すべき直感的理解

第三に重要なのは、モデルに則した理解を重視する必要がある一方、それとは別の視点からの直観的理解、換言すれば健全な常識によるチェック、という作業もまた重要なことである。大学院生や若手研究者と話していると、理論的にはこのようになる、ただしそれは理論の結果だからその理由はよくわからない、とってそれ以上積極的に説明しようとしはしない場面にでくわすことが時々あります。それは、生産的な研究者がとるべき態度といえませんが。

分析を通して得られる一定の帰結が、常識的な理解ないし推論と異なるような場合、それはモデルが適切に構成されていない（あるいはモデルの本質なり構造が十分に理解できていない）か、あるいは常識的な理解が適切でない（モデルの方が本質を表現している）か、いずれかであろう。こうした場合には、なぜ常識的理解との間で齟齬が生じているのかに洞察を加え、さらに深めてモデルを改良するか、あるいは逆に常識の限界を認識するか、が必要になります。こうした作業の繰り返しを通じてこそ、研究結果は確固としたものになるわけです。

### 要領よくまとめた平易な提示

第四に重要なのは、研究結果についての明解かつ平易な紹介と報告です。研究結果を報告する論文は、厳密性を要するなどその性質上ある程度難解なものにならざるをえない面がありますが、それでも、単に論理的であるだけでなくできるだけ平易な説明（lucid verbal explanation）を志すことが大切だ、と私は考えています。平易な文章が書けるとは、単に執筆技術の問題でなく、書こうとすることがらの本質が深く理解できているかどうか（それができないようならば本質が理解できていない）という重要な問題であります。

とくに論文の場合、そのタイトルは、その論文の最も短い要約ともいえますので、十分に時間をかけて煮詰めたもの、つまり問題意識・分析視角・分析手法・結論などをできるだけ多くかつ正確に盛り込んだもの（それは魅力的なタイトルになるはずで）、にすることが絶対的に重要です。また論文の冒頭には、徹底的に練り上げた「概要（abstract）」を付けることが欠かせません。有力な研究論文ジャーナルでは、掲載論文の冒頭に概要の付されていないケースはまずありません。一般に、概要のついていない論文は、極論すれば読む必要はない、と私は考えています（そうした論文は、実際のところ内容が煮詰まっていない場合が多い）。なお、論文の書き方に関する書物は、生協書店へ行けば多種多様なものが山積みになっていますが、木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書、一九八一年）を推薦します。この右に出るものは、未だにみかけません。

また、論文の一部として掲載するグラフや計表も、細心の注意を払って作成することが必要です。多くの論文や書物をみると、文章はしっかりと書かれていても、この点の配慮が不足しているケースが少なくありません。良い図表とは、明快さ（clarity）、正確性（precision）、そして効率性（efficiency）という三つの基準を満たすものです。これに関しては、Edward R. Tufte, *The visual display of quantitative information*, 1983, Graphics Press がたいへん参考になります。多くの実例が入っており、ページをめくるのが楽しい大判の書物です。

## 研究アドバイスの総括

以上、研究活動において私が重要と考える四つの点を指摘しました。すなわち、（一）基本概念を明確化すること、（二）本質的要素を取り出した理論化を試みること、（三）理論的理解は直感的な理解にも照らして点検すべきこと、そして（四）要領よくまとめた平易な提示に細心の注意を払うこと、です。

これらは、いわれてみれば当たり前のことかもしれませんが、しかし、大学教育（ことに大学院レベル）で本当に重要なのは、単に多くの知識を身に付けることではなく、永続性を持つこうした能力を真に自分のもの（second nature）にすることであり、それこそが国際性を持つ教育だ、と私は考えています。

よい研究テーマは、努力しないでいて、ある時こつ然と思いつくというものでは決してありません。それは、まず猛烈な知的インプットを必要とし、その後ある時間が経過した段階で発火点に達する、という性質のものであります。修士課程の二年間は、諸君の長い人生において、気力、体力、知力すべてが最も高い一生に一度の時期です。優れた修士論文を生み出すには、今日から直ちに、そのために全力で取り組む必要があると思います。千里の道も、一歩から始まります。

やや説教口調になりましたが、私のプレゼンテーションは、以上です。あと残された時間でご質問をお受けし、それに応答するかたちで、研究の方法論について皆さんと議論をすることにしたいと思います。

（大学院授業「概念構築」における特別講義、二〇〇〇年六月二日）